

和歌により私を露わすこと

―俊成卿女の『狭衣物語』摂取歌を例に―

江草 弥由起

はじめに

俊成卿女が詠歌に物語を取り入れていたことは、森本元子^{注1)}らにより明らかにされている。渡邊裕美子^{注2)}は俊成卿女の『源氏物語』摂取の方法を定家と比較した上で「『源氏物語』摂取の方法の特色は、物語に深く沈潜し、特に人物や自然の描写に織り込まれた心理的な表現を細やかに読み取って、その情調を和歌に纏綿することということができる」と述べ、俊成卿女の『源氏物語』摂取歌のほとんどが四季歌であることから、俊成卿女の『源氏物語』摂取は「主に物語の恋歌や雑歌的な歌を四季歌に生かすための方法」であったと指摘する。また、俊成卿女が積極的に詠歌に取り入れた物語に、定家編纂の『物語二百年歌合』において『源氏物語』の番とされた『狭衣物語』がある。俊成卿女の『狭衣物語』摂取（以降、狭衣摂取と表記）の方法について、濱本倫子^{注3)}は「俊成卿女は物語の場面に深く入

り込み、作中人物の心情に即して詠出しようとする姿勢が顕著である」とし、物語に浸りきったところから発想する方法が渡邊の指摘する『源氏物語』摂取の方法と共通すると述べる。歌人らが歌に取り入れる物語場面には大方の傾向があり、そこから外れた場面を繰り返し摂取する事例は稀である。本稿は、その稀な事例から、俊成卿女の『狭衣物語』女二宮手習歌場面の異質な摂取を詳らかにすることで、その意義及び歌風的一端を明らかにするものである。

一 『狭衣物語』女二宮手習歌場面の摂取

『狭衣物語』摂取は新古今歌人らを中心に多く確認できる。取り立てて摂取されるのは、狭衣の子を身ごもるも連れ去られ虫明にて入水をはかった飛鳥井女君に関連する場面や、狭衣最愛の源氏宮への禁忌の思いに関連する場面である^{注4)}。女二宮

は作中において狭衣を拒否する女君として描かれており、作中の詠歌は六首と、飛鳥井女君の二七首^{注5}などと比べて少ない。その六首の内三首が手習歌場面のものであり、同場面の歌は狭衣詠一首も含めいずれも定家編纂の『物語二百番歌合』に所収される。

ここで、女二宮手習歌場面（以降、手習歌場面と表記）を確認しておきたい。女二宮は嵯峨院の皇女。一度は狭衣への降嫁の話が持ち上がるが身勝手な狭衣の行動により、狭衣の子を懐妊したにも関わらず降嫁の話は立ち消える。その後、密かに若君を出産、出家し狭衣を拒絶する。一方狭衣は、飛鳥井女君との間にできた姫君が一品宮のもとで養育されていると知り、その周辺を窺っていたところを世間の人々に一品宮に思いを寄せていると噂され、結婚を余儀なくされることとなる。望まぬ結婚になす術のない狭衣は、左引用の手習歌場面にてその苦悩をAの歌で女二宮に訴える。なお、引用中の歌には便宜上A～Dのアルファベットを付し、詠者名を（ ）で付した。

A 折れ返り起き臥しわぶる下萩の末越す風を人の問へか
し（狭衣）

〔中略〕宮つくづくと思し出づること多かる中に、この「末越す風」のけしきは、過ぎにしその頃もかやうにやと、少

し御目留らぬにしもあらで、筆のついでのですさみに、この御文の片端に、

B 夢かとよ見しにも似たる辛さかな憂きは例もあらじと

思ふに（女二宮）

「起き臥しわぶる」などあるかたはらに、

C 下萩の露消え佐し夜な夜なも訪ふべきものと待たれや

はせし（女二宮）

D 身にしてみて秋は知りにき萩原や末越す風の音ならねど

も（女二宮）

など、同じ上に書きけがさせたまひて、細やかに破りて、典侍の参りたるに、「捨てよ」とて賜はせたるを、隠れに持てゆきて見れば、

女二宮は狭衣の訴えに見向きもしないが、広げられたままの文とAの歌を目にしてしまふ。そして、苦しい胸の内を詠んだB～Dを文の端に書き付け細かく破り、典侍に捨てるよう命じるが、典侍の裏切りにより女二宮の歌は狭衣に伝わることとなる。

この手習歌場面は新古今歌人らの関心を惹くものであったよう、【資料1】に挙げるように定家や後鳥羽院、良経らも撰取を行っている。

【資料1】後鳥羽院歌壇構成歌人らによる手習歌場面の摂取例

*各詠歌の摂取対象歌をA～Dで示した。初出の歌集名のみ記載し他出は省略、()内の形式を揃えるため私家集にも詠者を記す。引用和歌は便宜上、適宜表記を私に改めている。

- ① 萩原や末越す風の穂に出て下露よりも忍びかねける
C + D (秋篠月清集 治承題百首 草花 四三〇 良経)
- ② きりぎりす恨むる声も庭の萩の末越す風も秋ふけにけり
D (正治初度百首 秋 五一 後鳥羽院)
- ③ いくかへりなれても悲し萩原や末越す風の秋の夕暮
D (同 秋 一三四二 定家)
- ④ 消えわびぬうつろふ人の秋の色に身を木枯らしの杜の下露
C (千五百番歌合 恋一 一一九 一番右勝 定家)
- ⑤ 下萩の露消えわぶる虫の音にうたて寂しき風の音かな
C (同 秋二 六四四番右 通具)
- ⑥ 世中になびきおきふす下萩も末越す風に露は落ちけり
A (同 秋三 七二八番右 通具)
- ⑦ 夢かとは見し面影も契りしも忘れずながら現ならねば
B (仙洞影供歌合 六七 俊成卿女)
- ⑧ 消えかへり露ぞみだるる下萩の末越す風はとふにつけても
A + D (水無瀬恋十五首歌合 七四番右 俊成卿女)

⑨ 思へただ逢ふ夜稀なる明け暮れに露消えわびし人の面影

C (後鳥羽院御集 恋百首 九五二 後鳥羽院)
萩原や露越す風にすむ月に身にしむ秋の色ぞ見えける

D (建保元年七月内裏歌合 一番右 俊成卿女)
⑪ 秋来ぬと末越す風に下萩の露消えかへりむすばれつつ

C + D (俊成卿女集 北山三十首 四〇 俊成卿女)
⑫ 消えわびし露の下萩しをれ葉にいく夜な夜なの霜結ぶらん

C (宝治百首 寄草恋 二八七三 俊成卿女)

定家を例に挙げて見ると、手習歌場面の摂取歌は③④の正治・建仁期の二首のみであり、定家が同物語の飛鳥井女君や源氏の宮思慕の関連場面を繰り返し取り入れることを勘案すると、摂取の程度は薄く思われる。それは良経や後鳥羽院も同じく、同場面を取り入れはするものの、繰り返し摂取を行う傾向は見られない。一方で俊成卿女は、仙洞影供歌合の時期から宝治百首に至るまでの長きに渡って繰り返し摂取を行っており、【資料1】に挙げた例の半数近くが俊成卿女詠であることから、俊成卿女の方法が他歌人と異なる在り方であったことが理解できる。俊成卿女が同場面を繰り返し取った要因は奈辺にあるのであろうか。俊成卿女の手習歌場面摂取の在り方を良経、後鳥羽院、定家と比較し、その特徴を明らかにしておきたい。順番は

前後するが、まず後鳥羽院詠②について、初二句目「きりぎりす恨むる声」は、「きりぎりす恨むる声ぞ弱りぬる過行く秋の心強さに」（御室五十首 一三一 隆房）からの影響が指摘でき、類似性からも隆房詠をベースにしつつDの「末越す風」を摂取することで秋のつらさを表している。後鳥羽院詠⑨については、二句目「逢ふ夜稀なる」に「見てもまた逢ふ夜稀なる夢の中にやがて紛るる我が身とものがな」（源氏物語 若紫 光源氏）を響かせ、四句目「露消えわびし」ではCから詞の摂取が見られるものの⑨の歌意自体は源氏物語歌の方に沿っている。後鳥羽院の手習歌場面摂取は、女二宮詠の詞を取り入れる方法であることが分かる。

良経詠①について、Dの三、四句目「萩原や末越す風の」をそのまま詠み込み、「ほにいでてしたつゆよりもしのびかねける」と、末越す風により萩の穂先に漏れ出る忍ぶことのできぬ思いを表す。物語場面との関連は見られず、良経の摂取も後鳥羽院と同じく女二宮詠の詞を取り入れる方法である。

定家詠③について、良経詠①と同じくDの「萩原や末越す風の」をそのまま詠み込み、さらに③は「いくかへりなれても悲し」と萩の葉が風に幾度も裏返される様子を詠み込むことで、度重なる狭衣の冷淡な仕打ちに心を痛める女二宮の姿を想起さ

せつつ秋の夕暮れの切なさを詠む、場面摂取の方法を取っている。定家詠④について、本歌は「人知れぬ思ひ駿河の国にこそ身を木枯らしの杜はありけれ」（古今和歌六帖 一〇四七 よみ人しらず）であり、辛い物思いをC同様「消え侘びぬ」「下露」で表現しているところに摂取が考えられるが、④は男に飽きられる辛さを詠んでおり歌意の点では女二宮詠を取り入れてはいない。

良経、後鳥羽院、定家が手習歌場面を摂取する場合、当該場面の悲劇は女二宮側にあるためか女二宮詠C Dからの詞取りが多くなされ、D「末越す風」を秋の物悲しさを表す詞として用いる摂取方法をとる傾向にあることが看取できる。恋歌に詠まれる場合とて、本説取りは定家詠③の他はなされておらず、大方詞取りにとどまっている。

この傾向に対し、俊成卿女は手習歌場面のA Dのいずれの歌も摂取の対象とした上、繰り返し長期に渡って詠じている。よって、摂取時期を建仁期（⑦⑧）、建暦期（⑩）、晩年期（⑪⑫）に分割し考えることが可能である。俊成卿女の当該場面摂取については、濱本^{注6}により検討されている点もあるが、改めて確認しておきたい。

建仁期⑦について、Bの初二句にわたる「夢かとよ見し」を

同じ句に詠み込んである。「夢かとよ見し」の対象をBは辛さとするのに対し⑦は相手の面影と契りを交わしたことに詠み変えつつ、歌意は契りを交わしたにも拘わらず狭衣の訪れをあてにできなかった女二宮の状況と重ねる撰取方法を取っている。

⑧について、俊成卿女は「下萩の末越す風はとふにつけても」とAの狭衣詠「下萩の末越す風を人の問へかし」を返歌の体で転じさせ、女二宮になり代わったように詠じている。手習歌場面を撰取した俊成卿女の歌はいずれも女君に深く共感し、あたかも女君と詠歌主体を同一化するかの如く物語に深く浸る中で詠出される。他の歌人らが手習歌場面に求めたのは秋の物悲しさを表現する方法として女二宮詠の詞を撰取することであったのに対し、俊成卿女は本説取りを行い、狭衣詠を踏まえつつ女の二宮に成り代わり詠じるという撰取方法を取っている。

建暦期⑩について、女二宮詠Dの上句を⑩では下句に組み換え、「末越す風」を「露越す風」に詠み変える撰取を行っている。そして手習歌場面^{注2}に描かれぬ「月」を詠み込むことで、物語歌の心情を取り込みつつ物語場面にはない秋夜の情景を表す方法をとっている。

晩年期⑪について、C「下萩の露消えわびし」+D「末越す風」を取り入れ、「末越す風」に物悲しさを掻き立てる詠みぶ

りは、当該場面の女二宮の心情に沿ったものである。「寄草恋」題にて詠まれた⑫について、Cの初二句「下萩の露消え侘びし」を組み換え⑫初二句を「消えわびし露の下萩」とし、Cの女二宮詠同様に相手の訪れのない「夜な夜な」の語を詠み込みに悲しみに暮れる様を表す。物語歌の表現を取り込みつつ、Cおよび同場面には詠まれていない「霜」を新たに加え、物語の心情を撰取する方法を取っていることが分かる。

⑦⑧⑩⑪⑫により、俊成卿女の手習歌場面撰取の特色点は、建仁から宝治にかけての長期に渡って繰り返しなされる撰取例の多さと、歌人として出立した建仁期の詠作⑦⑧にて他歌人と異なる方法を取っている点にあると言える。俊成卿女が物語撰取を得意としたことは周知の事実であるが、建仁期⑦⑧のように女二宮と詠歌主体を同一化するかの如く物語に深く浸り込み、女二宮に成り代わり狭衣に返歌するかの様な方法は殊更に異質である。俊成卿女が物語の登場人物に成り代わるが如く肩入れし撰取を行なった例は、他を見回しても女二宮を除いて例はない。この建仁期の異質さを紐解く手がかりは、通具との関係にあると考えられる。

二 建仁期の俊成卿女と通具

建仁二年（一一〇二）七月十三日、俊成卿女は歌芸により後鳥羽院に召され、女房歌人として出仕した。通具が按察局を新妻に迎え入れた後に土御門家の後見を受けて異例の形で成された出仕であったことは、森本元子（注⁸）、田淵句美子（注⁹）の研究で指摘されている。先行研究でも多く指摘される『明月記』建仁二年七月十三日条を確認しておきたい。

昏黒向^二押小路^{（万里小路）宅}。此女房今夜初参^レ院云々、此事始終尤似^二狂氣^一。宰相中^{（通具）}将与^二権門新妻^一同宿、旧宅荒廢之間、依^二歌芸^一自^レ院有^レ召^レ之。且又彼新妻露顯之時、此等事皆構申置歟。棄^二本妻^一与^二官女^一同宿、在^二世魂^一之所^レ致耳、事又雖^レ非^二面目^一、宰相中將一昨日、可^二行訪^一之由相示。又入道殿同可^二扶持^一之由被^レ仰。仍所^二到向^一也。此人事又先妣殊鍾愛、難^レ見放^一之故也。但每事相公羽林沙汰云々。内府又以^二入道殿御文^一举申、已被^レ聽^二禁色^一云々、頗為^二面目^一。亥時許予寄^レ車、（入道殿先^レ是還御了）。未^レ被^レ出以前先参^二御所^一、車可^レ寄^二高倉殿局^一、（内府妹云々）行^二其局^一。入道殊可^二扶持^一之由申、仍参人之由触^二其局^一了。

※傍書の（ ）内に人物名を補った。

「此事」（傍線部）とは、露顯の時には、通具が新妻と同居し、俊成卿女が歌芸により院に召され出仕することが土御門家・御子左家の両家に了解されていたこと。そして、出仕の世話を通具が行い、通親の計らいで禁色が許されたことなど、土御門家が俊成卿女の後見をしたことを指している。それに対し定家は「始終尤似^二狂氣^一」と憤りを露わにしている。憤りの所在を考えると、憤りを同じく「似^二狂氣^一」と表する『明月記』建仁元年（一一〇一）十二月四日条の例があげられる。同条にて「似^二狂氣^一」は、父実教が本家に帰ったにも関わらず、未だに閑院の人間のようにふるまう教成の無礼な様子に対して用いられている。つまり、一般的な家の在り方に対する異例な振る舞いに対し、定家は「似^二狂氣^一」という表現を用いていることになる。先の定家の憤りは、通具が本妻の俊成卿女を棄て新妻と同居して（棄^二本妻^一与^二官女^一同宿）おきながらも、土御門家の後見でもって俊成卿女を出仕させたことが、一般的な家の在り方から逸脱した異例の事態であったが故ということになる。

ここで、異例の出仕前後の俊成卿女と通具の関係を確認しておきたい。通具が按察局を妻に迎えた時期について、『明月記』正治二年（一一〇〇）正月三日条の「太理」を通具とした石

田吉貞の論をもとに森本^(注10)が正治元年の秋冬ごろと推定し、その説が踏襲されてきたが、田測^(注11)が「太理」は藤原宗頼であると指摘し、通具と按察局との結婚は建仁元年（一二〇一）秋冬から翌二年の初め頃と推定したのが現在通説となっている。田測はその結婚の必然性についても詳細に検討し、建久九年（一一九八）五月六日に通親一男の宰相中将通宗が三一歳で急逝したことにより権門の嗣子としての役割を期待されるようになった通具が、後鳥羽院・土御門院との関係を強固なものにするため按察局（能円女、一条能保室、土御門院御乳母）と結婚するのは当然の成り行きであったと述べる。通具の父通親が花山院忠雄女と結婚し一男通宗をもうけ、平家隆盛の時期には平教盛女（清盛姪）と結婚し二男通具をもうけ、後鳥羽院乳母である高倉範子と結婚し三男通光をもうけたことから、土御門家が権勢の流れに合わせて婚姻で結びつきを求めているのは明白である。通具にも婚姻によって土御門家と後鳥羽院・土御門院との関係を深める役割が求められたのは自明の理であろう。

しかし通具は、嗣子としての役割が期待される風潮の中にあっても、俊成卿女と離別するつもりはないと定家に弁明したことが『明月記』建仁元年二月二十八日条に見える。

宰相中将今夜心閑雑談、新妻事等且語^(通具)之。誠雖^(按察局)失^(按察局)当^(按察局)初^(按察局)

本意^(俊成卿女)、旧宅^(俊成卿女)「妻力」更不^(俊成卿女)可^(俊成卿女)離別^(俊成卿女)之由、有^(俊成卿女)三^(俊成卿女)会尺詞等^(俊成卿女)。若為^(俊成卿女)三^(俊成卿女)実議^(俊成卿女)歟。又内府^(通親)之例也。不^(俊成卿女)可^(俊成卿女)為^(俊成卿女)恨歟。近代之法只為^(俊成卿女)先^(俊成卿女)權勢^(俊成卿女)。何為^(俊成卿女)乎。

「新妻」は按察局、「旧宅（妻力）」は俊成卿女の方を表すと解するのが一般的であり、稿者にも異論はない。傍線部には、新妻のことなどを語り、当初の本意とは違うが俊成卿女と離別しないと、通具より弁明があったことが記されている。定家と俊成卿女は同じく俊成の庇護下にあるが、『明月記』内で俊成卿女への言及が少ないことから、定家が全面的に支援していたとは考え難い。この時期には、定家への弁明が必要とされるほど、俊成卿女と通具の関係が複雑なものになっていたと考えるのが妥当であろう。「新妻」は婚姻が成立した女性に対して用いられる語であり、本条において按察局が「新妻」と表されることを勘案すると、建仁元年二月にはすでに通具と按察局の婚姻は成立していたと考えられる。元からいる妻を離別せず新妻を迎える状況が一般的にあり得るものであったのが問題となろう。

この問題について、『明月記』嘉祿二年（一二二六）五月二十七日条には新妻を迎えながらも本妻と離別していない例が確認できる。

中将入道（公棟）嫁新妻独歩云々。時房朝臣子次郎入道之

旧妾也〔彼等妻妾皆雖參商、分与所領之間、猶有其力〕。本妻常海之女、又不別離、猶相兼歟。

藤原公棟が次郎入道（北条時房の子）の旧妻を新妻に迎えないが、傍線部のように本妻の常海之女と離別しない状況が記されている。それに対して定家は異例とは記していない。離別するのが一般的であり、離別しない状況が少数であったために「又不別離」とわざわざ記されたかと捉えることもできるが、いずれにせよ本妻と離別しないまま新妻を迎える状況自体は有り得たという証左にはなろう。なおこの問題について、先行研究で指摘されるのは主に平安期の例であるが、鎌倉初頭の婚姻形態がそこから極端に逸脱するとは考え難いため参照とする。婚姻形態の歴史学の観点からの研究は高群逸枝に始まり関口裕子、栗原弘、服藤早苗など〔注12〕、日本文学の観点からの研究は工藤重矩〔注13〕、増田繁夫〔注14〕など多くの研究者により進められているが、非法ながらも社会では認知されている例があるが故に法令の検討のみでは婚姻の実態の把握をしきれないという複雑さから、未だ決着のついていない点が多い。研究者により一夫一妻制と一夫多妻制の定義は細かな点で異なるところがあるが、「妻」は「嫡妻（正妻）」のみとする一夫一妻制も、「妻」が複数いる中で「嫡妻（正妻）」は事後に決定するとする一夫多妻

制も、いずれも「嫡妻（正妻）」は一人であり複数持つことはできないとする点は共通している。「嫡妻（正妻）」の優越性については、梅村恵子〔注15〕が摂関家の藤原基経・忠平・師輔・兼家ら男子の官位昇進の年齢を調査の上、所生の母により昇進に差が認められることを指摘し、「嫡妻（正妻）」とその他の妻・妾とでは明確な区別がなされていたとする。

すでに「嫡妻（正妻）」のある男が、新たに妻を迎える際に元の妻との離別が必ず求められたかについては、これまでの研究でも意見が分かれるところである。梅村は離別しない限りは「嫡妻（正妻）」の権利は奪われず他の妻が同等の権利を持つこととはないとし、工藤は妾が妻になる例はなく「嫡妻（正妻）」の地位は婚姻当初に決まっており離別しない限りはその地位が奪われることはないとする。一方で、関口は八世紀の嫡妻制度については一般的には未分離であり、貴族層では蔭位と関連して事後に嫡妻が問題となったと嫡妻（正妻）は事後に決定するとし、増田は兼家と時姫の例、道長と明子の例を詳細に検討した上で「正妻」は事後に決定するため同時に複数の妻がいる状況はあり得るとし、また新しい妻を迎えるのに本からいる妻を夫から離別した確実な例は見当たらないと述べる。この問題について、安易な結論を導き出すことは避けたいが、本妻と離

別しないまま新妻を迎える状況自体は有り得たということになる。

建仁元年一二月の通具は俊成卿女と離別しないまま按察局を新妻を迎えた状況であり、今後も離別しないと弁明をしたということになる。通具の弁明は、新妻を迎える際に本妻との離別は必須ではないが、想定されるものであるが故に為されたと考えるのが穏当であろう。結婚と離別が同時期とは断じ難いとなると、俊成教女の離別はいつ頃なのかという問題が立ち上がる。田淵は『明月記』において俊成卿女が新宰相中将、押小路女房と呼ばれるのは離別後であり、通具室であつた頃とはつきりと区別されると述べる。

しかし『明月記』で新宰相中将の呼称が最初に確認できるのは建仁二年（一二〇二）二月一日条である。

仍参_レ院、退出向_二押小路万里小路、（伯宅、）新宰相中将

上許_一、道殿入渡御、相公被_レ坐、清談移漏退出、夕宿_二九

条_一、

新宰相中将は建仁元年八月十九日に参議となつた通具を表す。押小路は通具が建仁元年正月に相伝したもので俊成卿女はそこを住まいとしたことから、「新宰相中将上」は俊成卿女を表すと考えて問題なく、この時点で俊成卿女は通具の「上」であ

るということになる。その後、元久元年（一二〇四）一月二七日条には「女房（押小路）」とされ、二人が往年のように連れ立って俊成の見舞いに訪れたこと、今は別居していることが記されている。

已時許大_{（通具）}理相_{（通具）}具女房（押小路）被_レ来。尤似_レ有_二芳志（於_レ今者女房已別宿云々。今相伴如_二年来_一。共入_二臥内_一見参。

『明月記』における俊成卿女の呼称は、厳密には、ただ一人の妻の頃、新妻が迎えられた頃「新宰相中将」、別居後「押小路女房」で区別されていると言えよう。建仁二年（一二〇二）七月には通具と按察局は同居し、翌建仁三年には通具と按察局の間に嫡子となる具実が生まれる。建久九年（一一九八）五月に一男通宗を失つた土御門家から権門の嗣子としての役割を期待されるようになった通具に新妻（按察局）に迎える話が浮上した時には、俊成卿女の離別はいずれ求められることであり、婚姻（結婚・離別）は当人同士の問題ではなく家長の権限が強く影響を及ぼしたとの通説を勘案するなら、この離別は土御門家（通具）と御子左家（俊成卿女）との間で、どういう形でいつ為すが問題であつたのではないだろうか（注₁₇）。離別後の通具と俊成卿女の関係の円満さは、『明月記』元久元年一月二七日条の二人で共に俊成のお見舞いに訪れたことや、承元元

年（一二〇七）一〇月一日条の火事で避難してきた俊成卿女の元に通具が駆けつけたことから窺える。これらの条にて定家は、通具が離別した俊成卿女に当たり前のように寄り添う姿に何の苦言も呈していない。建仁二年の俊成卿女の出仕にあたり、通具ら土御門家が後見を行った事に対して定家が甚だしく憤慨したことをふまえると、些か疑問が残る。ただかまりの解消はただ時の流れに任されたわけではなく、離別が土御門家（通具）と御子左家（俊成卿女）の双方に望ましい形で為されたが故と考えて然るべきではないか。つまり、建仁期の俊成卿女と通具は、家に求められる自身の役割を強く意識せざるを得ない時期であつたと推察されるのである。

三 俊成卿女と通具の手習歌場面摂取の意義

俊成卿女の手習歌場面摂取の問題に立ち返りたい。建仁期の俊成卿女は土御門家から求められる離別と異例の出仕の中にあつて、女二宮と自己を同一化するかの如く物語に深く浸り込み、女君に成り代わり狭衣に返歌するかの如く詠ずる摂取方法を生み出している。それは、避けられぬ通具の結婚に掻き乱される我が身を、余儀なくされた狭衣の結婚に掻き乱される女二

宮に重ね合わせ、その異例さを自身に承允させ、また周囲に斟酌を求める行為でもあつたのではないか。俊成卿女が自身と女二宮を重ね合わせてのふるまつた意図が、自己憐憫や周囲に憐れみを求めるところにはないことは『無名草子』^{（注18）}からも察せられる。

女二の宮の尼になるこそ、また、いとうれしけれ。一品の宮の御事出で来て後、

思ひきや律の門を行き過ぎて草の枕の旅寝せむとはと聞こえたるに、

「古里は浅茅が原となり果てて虫の音しげき秋にぞあらまし

今こそうれしく」と院のおほせられたるもいみじ。

大宮の失せいとあはれなり。「中略」女二の宮しばしもおほしのどめず、おほしすてたまひけむこともことわりなり

この評に拠ると、女二宮は狭衣に振り回され苦悩する女君ではあるが、ただ悲劇的な女という捉え方はなされておらず、潔く出家したことが良しとされ、手習歌場面の発端である一品宮との結婚を弁明する狭衣の歌に自ら返歌せず、代わりに父院が返歌したことは「いみじ」と評価される。女二宮に対して否定的

な評価はなく、その潔さが良しとされるのみである。『無名草子』成立時期の価値観に、女二宮の潔さを良しとする風潮があったということになる。俊成卿女の女二宮の如きふるまいは、離別しつつも通具らの庇護を受けて出仕する異例の身を、男に振り回されるのみではない女二宮の如き潔い女の姿に昇華させ、異例の出仕を醜聞ではなく物語に仕立てる所にあつたのではないか。

この女二宮をふるまう俊成卿女の行為は決して独りよがりなものではなく、むしろ通具と共に作り上げた表現と見られるところがある。通具詠⑥は建仁期の詠であり、良経、後鳥羽院、定家らと異なり、女二宮詠ではなく手習歌場面狭衣詠Aのみから撰取を行なっている。特筆すべきは、狭衣詠Aのみからの撰取は通具詠⑥の他に例がないことである。通具詠⑥は本歌取りの原則から外れ、極端に狭衣詠と類似した撰取の方法を取っている。

⑥ 世中になびきおきふす下萩も末越す風に露は落ちけり
A 折れ返り起き臥しわぶる下萩の末越す風を人の問へかし
通具詠⑥は秋歌に詠み変えてはいるものの、二・三・四句が狭衣詠Aと句の位置も詞も一致する。殊更技巧的な撰取とは言えず、狭衣詠Aを焼き直したような詠みぶりをしている。狭衣詠Aが、

風になびき伏せる下萩に世間の噂で結婚を余儀なくされ項垂れる狭衣自身を重ねて女二宮に情けを乞う歌であることをふまえると、通具詠⑥が極端に狭衣詠Aに類似しているのは、周囲により結婚を余儀なくされる狭衣に通具の姿が重ねられてのこととも解釈できよう。『千五百番歌合』の詠進は建仁元年六月のことであるから、田渕が推定する通具と按察局の結婚の時期(建仁元年秋冬から翌二年の初め頃)以前に通具詠⑥は詠まれたことになる。つまり推定される結婚の時期と詠進の間には、およそ三ヶ月半の期間があるということになる。しかし、建久九年五月に通宗が急逝し、正治二年三月に藏人頭に任ぜられた通具に、権門の嗣子として婚姻で家を権勢と結びつける役割を果たすことが期待されるのは自明の理であつたことを含め考えるに、『千五百番歌合』詠進時の通具は、すでに周囲に求められ余儀なくされる結婚と俊成卿女との関係の中で懊悩する立場にあつたのではないか。通具詠⑥に見られる狭衣と自身を重ね合わせふるまうが如くの撰取は、避けられぬ按察局との結婚と、俊成卿女との離別を前に生み出されたことになる。

つまり、建仁期の俊成卿女と通具の『狭衣物語』手習歌場面撰取の意義は、自身らの置かれた状況を『狭衣物語』の女二宮と狭衣の関係に擬え歌の上で物語をふるまうことで、異例の状

況を周囲に示し斟酌を求めるところにあったのではないか。

言うまでもなく、通具詠⑥も俊成卿女詠⑦⑧も後鳥羽院歌壇において詠み出されたものである。通具詠⑥は後鳥羽院の第三度応制百首『千五百番歌合』に出詠されたことになるわけだが、俊成卿女と通具が歌の上で物語をふるまうことで自身らの置かれた状況を周囲に示す手法を取ることが容認される状況が建仁期の後鳥羽院歌壇には備わっていたのであろうか。後鳥羽院が歌人の身の上のような事や折に触れて詠まれた歌を評価したことは院の歌論や判詞から知られる。『後鳥羽院御口伝』の例を挙げると、後鳥羽院は定家批判を繰り広げる中で、定家の左近次将として二十年に及びなかなか出世できない身を嘆いた歌を自賛すべき歌であり、「ことがらもやさしくおもしろくも有やうなる歌をば必自讃歌とす」と、事にふれ折にふれて詠まれた歌を良しとする旨を記している。俊成卿女と通具が、自身らの身の上に起こった出来事を女二宮と狭衣に擬えをふるまい、異例な関係への斟酌を求めた趣向は、事にふれ折にふれて詠まれた歌を良しとした院の飲心を大いにかつたと想像できよう。

通具詠⑥は後鳥羽院の応制百首に詠進されたものの、俊成卿女詠⑦⑧は院主催の場でのものと、いずれも院の関与する晴の場において詠まれている。俊成卿女と通具の大胆にも私の事情を

晴の場に持ち出だす発想は、院に容認されるという確信なくしては生まれなかったであろう。その確信は通具の父通親の前例によって得られたのではないか。建仁期以前に、通親は『正初度百首』という晴の場において私の事情を持ち出し、それは後鳥羽院歌壇にて受け入れられている。通親は『正初度百首』恋十首にて、正治二年八月四日に妻の範子を亡くした私的な悲しみを「ひとり寝の枕にもなほ鳥の音は昔覚えて恨めしきかな」「嘆きあまりあくがれ出づるたまなりと君が袂にし結びとどめば」「逢ひも見でいかに成ぬる時の間は三年の秋の心地せしかと」と歌に持ち出していることが従来指摘される。久保田淳¹⁹は、後鳥羽院が召した最初の応制百首という晴の場で、亡き妻を偲ぶという「私」の事情で恋十首を全て埋めることを可能にしたのは、範子がそもそも院の乳母で今上天皇の外祖母であるという、一種の身内意識が亡き妻追慕の歌をためらいなく詠ませるに至ったのであろうとし、後鳥羽院はそのような身内意識を拒否しなかったとしている。また、永青文庫蔵「俊成・定家一紙兩筆懷紙」（二部抜粋）では、

内閣府
遺物多利 凡、述懷被止題「述懷之心

詠之旁雖有其憚此鳥題凡

一切不可叶候之間如此詠候偏以狹事

為先者為道遺恨候之故也

と、『正治初度百首』では述懐の題は止められており詠むのに憚りがあるという定家に対し、俊成は傍線部で通親の歌に述懐の心を詠んだ歌が多いと指摘し、だから問題あるまいと定家を鼓舞していることが確認できる。俊成が通親詠に述懐が多い事を問題視していないことから、久保田の指摘するように後鳥羽院歌壇には私の事情を歌で露わすことを拒否しない雰囲気があったと推察できよう。では、後鳥羽院歌壇にて、俊成卿女と通具が私の事情を歌に露わし弁明する必然性はどこにあったのであろうか。

四 和歌により「私」を露わすこと

俊成卿女の異例の出仕がなされた背景について、田淵^(注20)は土御門家が家を文化的側面から支える役割を役俊成卿女に担わせようとしたことであると指摘する。土御門家が関係を重んじた後鳥羽院の和歌への執心ぶりは建仁期には周知されており、『源家長日記』(建仁二年)には「世に女の歌詠み少なしなど、常に嘆かせ給ふ」と後鳥羽院が女流歌人の少ないことを嘆いたことや、召致した歌人の中に俊成卿女が含まれていたことが記

されている。俊成卿女は建仁元年の「土御門家影供歌合」に「新参」として出詠し、勝四持一との好成绩で歌壇に鮮烈な印象を与えている。そして同年六月には『千五百番歌合』の詠者に選ばれ、八月には初めて俊成卿女の名で「八月十五夜和歌所撰歌合」に列し勝四持二の好成绩を得るなど、後鳥羽院に出仕する前から俊成卿女の活躍は目覚ましいものであった。院の俊成卿女への期待は明らかで、召致されるのも当然という状況であったことは疑いようがない。後鳥羽院との関係を重んじる土御門家にとって、和歌で院の関心を惹く俊成卿女との結びつきは文化的側面での助力を求める意味で手放しがたいものであるが故に、院ひいては歌壇全体に異例の出仕の容認を求める必要があったとするのは理にかなう。とはいえ異例の出仕をそのまま訳ありのものとして押し通しては、土御門家が権勢を笠に着て俊成卿女を憐れにも利用していると捉えられかねない。しかし、俊成卿女と通具の異例の關係に物語を持たせれば、俊成卿女は悲劇の女ではなく女二宮の如く潔い女という印象に描き変えることが可能となる。そして、自他共に異例とする關係を物語の体で描き変え、美的なものに昇華させることで、俊成卿女と通具の繋がりには確たるものとなったと看取される例に『新古今集』がある。

後藤重郎^{注21}は『新古今集』入集の通具詠一七首中四首が

俊成卿女詠と並べて配されていることから明らかにし、俊成卿女と通具の歌が相並んで配されている六〇九・一一三五番歌の箇所について、「通常の配列の意識を越えた」ものであり、撰者や下命者たる後鳥羽院によって「意識的に連続して配された」と指摘する。ライバル関係にある定家と家隆を二二箇所と並べるのと同じく、俊成卿女と通具の関係性を表していることと理解して良いだろう^{（注22）}。

次いで『新古今集』の俊成卿女詠の特徴に、狭衣摂取がなされていることが挙げられる。建仁期の俊成卿女詠⑦は『新古今集』恋五・一三九一に入集している。「下燃えに思ひ消えなむ煙だに跡なき雲の果てぞかなしき」新古今 恋二 一〇八一は、飛鳥井女君の遺詠とそれに追和した狭衣詠の二首^{（注23）}を巧みに摂取したもので、後鳥羽院が恋二の巻頭にせよと命じたことが『明月記』元久二年三月二日条に見える歌である。「通ひ来し宿の道芝枯れ枯れに跡なき霜のむすばほれつつ」（新古今 恋四 一三三五）は、狭衣詠^{（注24）}を本歌にしつつも女君側に立って詠まれた歌で、有家・定家・家隆・雅経の四名の撰者により選ばれ恋四の巻軸に配されている。『新古今集』恋部の巻頭・巻軸と重要な位置に配された俊成卿女歌が『狭衣物語』を摂取

していることは象徴的である。

『新古今集』の要所に配された俊成卿女歌に狭衣摂取が見られること、俊成卿女と並列する通具詠がいずれも『千五百番歌合』の歌であることは、建仁期の二人の狭衣摂取と全く切り離しては考え難い。むしろ建仁期の複雑な関係を手習歌場面のふるまいで描き替えたことが、俊成卿女と通具の関係を物語的なものに昇華させ、そのイメージが『新古今集』で二人連続して配列される道筋を作ったのではないか。さらに踏み込むと、俊成卿女には『狭衣物語』と結びつく歌人というイメージが『新古今集』編纂の頃にはすでに構築されていたのではないだろうか。俊成卿女が歌人としての出立に際し『狭衣物語』の女二宮をふるまったことは、歌人としての自身のイメージを露わすことに繋がり、後鳥羽院歌壇において受容されたと考えられよう。

なお、物語に擬えた振る舞いと歌人イメージが結びついた類例に、隆房の業平取りがある。『隆房集』^{（注25）}の業平を気取る趣向は多くの先学らにより指摘されている^{（注26）}。『隆房集』を後に編纂し直した『恋づくし』^{（注27）}の改変は後人によるものとも考えられているが、『隆房集』は隆房自身の手によるものとする点で先行論は一致しており、隆房は自ら業平を気取ったと考えて問題ないだろう。『隆房集』の成立時期については、恋

の相手を小督と見做すか、また『千載集』の撰集資料と考えるかにより前後し、渡邊論^(注28)や家永論^(注29)に拠ると、成立時期は『千載集』『新古今集』よりも下る可能性がある。しかし、『千載集』所収三首が恋歌であり内二首が『隆房集』所収歌であること、『新古今集』一二〇・四・一二〇五番の贈答が歌だけでなく歌の詠まれた事情まで『伊勢物語』九九段を踏まえている^(注30)ことを勘案すると、業平の如く恋する男という隆房の歌人イメージは『新古今集』編纂時分には定まりつつあるように見られる。『新勅撰集』に至っては、撰歌された隆房詠五首の内恋歌三首は『隆房集』所収歌、他二首^(注31)も恋歌の体のものである。また、俊成卿女が⑧を詠んだ仙洞影供歌合にて、隆房は『伊勢物語』九九段の「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ」(一七四)を本歌取りした「見ずもあらずみもせぬ程のながめだにさこそ昔は日をくらしけれ」(九番左勝)の歌を出詠している。

隆房の業平の振る舞いが歌人イメージに結びついたのは、それが少なからず現実^(注32)に依拠するものであったからであろう。『隆房集』『平家物語』に描かれている、清盛婚となり近臣として高倉天皇に仕えた隆房が出自の高い天皇付きの女房(または天皇の妻)に恋し敗れる物語のすべてが虚構とは考え難く、物語

が発生する要因が少なからず現実^(注32)に存在したとするほうが自然である。隆房よりやや年長ではあるが活動時期を同じくした隆信も私家集にて業平を気取るが、勅撰和歌集における歌人イメージの定着は隆房ほど見られない。

現実を物語に擬え振る舞うことが歌人イメージに繋がった類例が建仁期周辺に見られることは、歌人らが歌壇内にて私を表出することを如何に捉えていたのか、また歌壇内の風潮を考えるにおいて今後検討の余地がある問題と考える。

終わりに

通具の手習歌場面撰取は『千五百番歌合』に集中し、それ以降は積極的な撰取が行われていない。通具の意図が現状への斟酌を求めることにあつたと考ええると、撰取が繰り返し行われなかったことに説明がつく^(注32)。

一方で、俊成卿女の撰取は建仁期だけでなく晩年に至るまで続いている。俊成卿女詠⑩^(注33)は、建保元年一月二〇日(注33)の俊成卿女の出家により通具との後見関係が解消された後に詠まれた歌である。俊成卿女の出家について、勝浦令子^(注34)は、夫が生存中の妻の出家は婚姻の解消を意味し、出家により

女性は自由な立場を得ることができたとし、森本は俊成卿女の出家は一般的な世を厭う隠遁の意での出家ではなく、別居関係にあった通具からの独立と歌人としてのデモンストレーションであったと推定している。俊成も通親も亡くなり、承元四年（一一一〇）には順徳院が即位し、世の変化と共に俊成卿女の置かれた状況も変わる中、出家し通具との後見関係を解消することで、俊成卿女は土御門家を文化的側面から支える役割から解放され、家に縛られない独立した立場を得たと言える。

独立した俊成卿女が⑩⑪と手習歌場面を摂取し続けたのは、自身が歌人としての出立に際し露わしたイメージを抱き続けていたからではないだろうか。山口達子^{（注35）}は「衛門の督の殿への百首」「北山三十首」を検討し、晩年の俊成卿女が『千五百番歌合』通具詠や自詠歌を摂取していることを指摘する。晩年の俊成卿女が若き日の表現に立ち返り求めた時に拠り所としたのが同歌合であったということは、彼女の根底に歌人として出立した建仁期の歌が存在し続けたと考えることができる。さすれば建仁期の摂取は、彼女にとって歌人としての初発を象徴するものであったと考えることが可能となる。俊成卿女にとって女二宮をふるまうことは、異例の関係を自らに承允させ、周囲に斟酌を求めるものとどまらず、歌人としての自身

のイメージを形成するものとなったのではないか。

以上、歌で手習歌場面をふるまう摂取方法は、新しい和歌表現を求める中で生まれたのみならず、通具との離別と異例の出仕・後見関係という複雑さの中におかれた俊成卿女が院女房歌人として生きて行くにふさわしいイメージを求める中で生まれ、それは自身のイメージ（＝私）を露わす行為に繋がったと考える。渡邊や濱本が指摘する「物語に浸りきったところから発想する」という俊成卿女の物語摂取の根底には、歌人としての私のイメージを求める中で女二宮をふるまった建仁期の苦悩があつてのこととも想像されるのである。

注1 森本元子『俊成卿女の研究』（桜楓社 一九七六）

2 渡邊裕美子『新古今時代の表現方法』（笠間書院 二〇一〇）

3 濱本倫子『俊成卿女の『狭衣物語』摂取について』（『和歌文学研究』八六号 二〇〇三年六月）

4 江草弥由起『物語二百番歌合』構成論―藤原定家の編纂意識を探る』（『国文学研究』一五五号 二〇〇八）

5 『狭衣物語』は伝本により、本文に「ある本に」と示され挿入される歌がある。二七首の内三首はそれに当たる。

- 6 前掲注3
- 7 手習歌場面で女二宮が狭衣の文を目にするのは「昼つ方になりて…」と、日中である。
- 8 前掲注1
- 9 田淵句美子『女房文学史論―王朝から中世へ―』（岩波書店 二〇一九）
- 10 前掲注1
- 11 前掲注9
- 12 高群逸枝『日本婚姻史』（至文堂 一九六三）、『招婿婚の研究 一・二』（理論社 一九六六）、関口裕子『日本古代婚姻史の研究 上・下』（塙書房 一九九三）他、栗原弘『平安時代の離婚の研究―古代から中世へ―』（弘文堂 一九九九）他、服藤早苗『純婿取婚をめぐる』（『平安王朝社会のジェンダー』校倉書房 二〇〇五）、同『平安中期の婚姻と家・生活―右大臣実資千古と婿兼頼の場合』（『埼玉学園大学紀要』二〇〇五）他
- 13 工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』（風間書房 一九九四）、『源氏物語の結婚…平安朝の婚姻制度と恋愛譚』（中央公論新社 二〇一二）
- 14 増田繁夫『源氏物語と貴族社会』（吉川弘文館 二〇〇二）、同『平安貴族の結婚・愛情・性愛…多妻制社会の男と女』（青簡舎 二〇〇九）
- 15 梅村恵子『摂関家の正妻』（青木和夫先生還暦記念会編『日本古代の政治と文化』吉川弘文館 一九七八年）、同『家族の古代史…恋愛・結婚・子育て』（同 二〇〇七）
- 16 前掲注9
- 17 妻帯者に婚姻の話が出て直ちに婚姻に至るわけではないことは、『栄花物語』頼通の例にも見ることができる。
- 18 『無名草子』の作者を俊成卿女とする説が有力視されていたが、田淵（前掲注9）により否定されている。本論においても、俊成卿女を作者と見做してはいない。
- 19 久保田淳『藤原定家とその時代』（岩波書店 一九九四）
- 20 前掲注9
- 21 後藤重郎『新古今和歌集研究』（風間書房 二〇〇四）
- 22 ただし、注21にて後藤が、俊成卿女と通具の並列は、俊成卿女の通具への慕情でもって鑑賞されるものとしてなされたとする点には、賛同し難い。
- 23 消え果てて煙は空に霞むとも雲のけしきをそれと知らじな（巻四 飛鳥井女君）／霞めよな思ひ消えなむ煙にも立ち遅れてはくゆらざらまし（同 狭衣）

- 24 尋ぬべき草の原さへ霜枯れてたれに問はまし道芝の露
(巻二 狭衣)
- 25 前掲注2 渡邊論考に拠ると、『隆房集』は二種三類に分
類される。それに拠り、第一種系統を『隆房集』、現存
しない第二種系統を『隆房集』と表記を分ける。
- 26 『今物語・隆房集・東斎随筆』久保田順解説(三弥井書
店 一九七九)、尾川真知子『隆房集』の物語性』(『風
間力三先生退職記念文集』一九八七)、中島泰貴『隆
房集と悲恋遁世譚―物語文学史への一視点―』(『国語
と国文学』九二六号 二〇〇一年二月)、和歌文学大系
『式子内親王集・建礼門院右京大夫集 俊成卿女集・艶詞』
谷知子解説(明治書院 二〇〇一)、前掲注2 渡邊論考、
家永香織『転換期の和歌表現 院政期和歌文学の表現』
(青簡舎 二〇一二年) など
- 27 前掲注2 渡邊論考に拠り、第三種系統(『艶詞』系)を
古名の『恋づくし』と表記する。
- 28 前掲注2
- 29 前掲注26
- 30 桑原博史「隆房と隆信―平安朝末期の物語愛好の精神に
ふれつつ―」(『平安文学研究』三〇号 一九六三年六月)

- 31 「たまさかに秋のひと夜をまちえてもあくるほどなきは
しあひのそら」(二二〇) は七夕後朝を詠んだもの、「今
こむとたのめしひとやいかならむ月になくなく衣うつな
り」(三三六) は擣衣を待つ女にかけての詠である。
- 32 前掲注1にて森元は、『千五百番歌合』の通具詠は俊成
卿女の代作であった可能性を示唆する。通具の『狭衣物
語』撰取が同歌合のみに見られる点から、代作である可
能性は少なくないであろうが、手習歌場面をふるまう趣
向は、双方の同意なくしては成立しえないと考える。
- 33 『明月記』建保元年二月七日条に俊成卿女の出家につい
ての記載がある。
- 34 勝浦令子『女の信心―妻が出家した時代―』(平凡社選
書一九九五)
- 35 山口達子『俊成女と通具』(『大谷女子大学紀要』三号
一九六九)

〈キーワード〉『千五百番歌合』 女三宮 源通具

(えぐさ みゆき／本学講師)